

語・チャガタイ語文献目録(写本目録を含む)、原典刊本、その他参照文献に基づいて行う。必要に応じて大学院生等に研究補助を依頼する。この作業の結果、全体的な傾向等が明らかになるので、特に研究価値が高い作品を数十点リストアップする。それらの文献のうち、未公開のものや刊本が不十分なものについては、写本実物の調査、およびマイクロフィルム等複写入手の手続きを行う。調査・研究の対象となる写本所蔵機関の所在は、イラン、トルコ、ロシア、ウズベキスタン、タジキスタンほか数か国に及ぶが、初年度は比較的利用し易いイランとトルコの諸機関所蔵の写本を調査する予定である。実物を調査できた写本についてはその情報を整理し、マイクロフィルムを入手した場合は早急に紙に焼付け、製本して利用し易い形にする。そして、そのテキストを読解・研究し、必要に応じてテキスト校訂、日本語訳、重要語句・固有名詞のデータベース化を行う。その過程で得られた成果については、論文等の形で学界に公表する。

---

## A01 中央ユーラシア地域に伝播した仏教の研究

研究代表者 吉田 豊  
神戸市外国語大学外国語学部 助教授

研究分担者 影山 悦子  
日本学術振興会特別研究員 神戸市外国語大学外国語学部

研究分担者 松川 節  
日本学術振興会特別研究員 京大大学生態学研究中心

研究分担者 松井 太  
日本学術研究会特別研究員 大阪大学文学部

### 研究目的

中央ユーラシア地域において様々な言語(イラン系諸語・ウイグル語・チベット語・モンゴル語など)で流布した同一原典テキストの伝承形態を探り、各文化圏に共通する要素と固有の要素とを解明し、その文化的背景を追究する。本研究は、各言語の原典を写本から解読できる専門家による共同研究であるため、同一原典テキストの当該文化圏における通時的伝承形態を位置づけるに止まらず、それが各文化圏を跨いで伝承されていく過程を究明するという、今まで手薄であった比較文化的観点へと発展可能なものである。

一つの典型的な研究例として、研究代表者らは、中国で成立した仏教文献『仏説善悪因果経』の漢文原典とソグド・チベット・モンゴル各言語版の比較研究をおこない、漢文及びモンゴル語版校訂テキストをすでに作成してい

る。本研究は、これらの成果を発展的に継承し、電子媒体と紙媒体による成果公表を目指しつつ、加えて、内モンゴル西部のカラホト遺跡から出土した写本をはじめとし、中央ユーラシア各地から出土した各言語仏典写本の電子テキスト化(画像データベース化を含む)を推進することによって、中央ユーラシア地域において多言語に翻訳され伝承されてきた仏教文献のデータを研究者間で共有することと、データの再配布が可能な環境を構築することを目指すものである。

### 研究計画・方法

多言語で伝存している仏教文献(例:『仏説善悪因果経』)の写本テキストについて、その収集と、テキスト・データベース化及び画像データベース化を推進する。写本テキストは、国内外の所蔵機関を通して写真・マイクロフィルムを入手することによって収集し、テキスト及び画像のデータベース化は、画像処理に特化されたパーソナル・コンピューター、画像読みとり装置、大容量記憶媒体を入手することによって実現する。吉田(研究代表者)はイラン系言語テキストと漢文テキストの収集と解読を担当し、松川(研究分担者)はチベット語・モンゴル語テキストの収集・解読とデータベースの構築、松井(研究分担者)はウイグル語・モンゴル語テキストの収集・解読、影山(研究分担者)はイラン系言語テキストの収集・解読と、テキストのデータ管理をそれぞれ担当する。

---

## A02 「本文批評と解釈」

---

### A02 韓孟聯句研究

研究代表者 川合 康三  
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 愛甲 弘志  
京都女子大学文学部 助教授

### 研究目的

唐代の韓愈と孟郊の二人を中心として作られた韓孟聯句は、古来難解をもって知られ、いまだに十分な注釈すらあらわれていない。しかし韓孟聯句は中国の詩史において大きな文学史的意味をもっている。形式上の新しさのみならず、詩の表現においても新たな試みが行われ、中唐という文学に大きな変容を生じた時代の特徴を集約している。

その聯句の正確で精緻な読解を目指し、全作品の詳細な訳注を完成させることを目的とする。それによって、韓孟聯句の文学上の意義を明らかにし、韓愈・孟郊の文学の従来不明であった部分を明らかにし、さらには中唐の文学の全体が新たに捉えなおされることが期待される。

#### 研究計画・方法

平成11年度：韓孟聯句の研究会を月一回、定期的に開き、この年度中には韓孟聯句のなかでも代表作といえる長編「城南聯句」をはじめとして、前半部を読解し、訳注の原稿を作成する。読解に当たっては韓愈の分を川合が、孟郊の分を愛甲が担当するというかたちで進め、訳注原稿の作成には川合が全体を総括する。韓孟聯句のような複雑で多様な作品には、多数の参加によって様々な視点から検討を加えることが有効である。代表者、分担者以外にも協力者を必要とするゆえんである。そのため研究経費のなかに「旅費」を用意し、広い範囲から協力を仰がねばならない。

渡した南人である西晋の陸機陸雲兄弟を題材に、南北の知性の衝突について考察してきた。本研究は、その後の時代を受け、南人を受け入れた北朝側に視点を移すものである。

#### 研究計画・方法

北朝の学術については、歴史・思想などの分野に、より掘り下げた先行研究が期待される。本研究では、研究補助の協力を得て、先行文献の調査収集、及びその整理を行い、主要なものについては概要を附した上で目録を作成する。さらに、その文献目録から、重要なテキストまた人物を選び、次年度以降の調査の柱を決定する。これらの作業には、中国や香港・台湾などで作成中の文献目録、またのテキストデータを使用し、Macintosh G3を用いてデータベース化する。また、北朝の人物に関しては、墓誌などの一次資料に当たる必要があり、それらについては、適宜、北京図書館・上海図書館などで文献調査を実施する。

---

## A02 北朝文化の研究 言語学史的考察

研究代表者 木津 祐子

京都大学大学院文学研究科 助教授

#### 研究目的

- ①本研究では、隋の陸法言による韻書『切韻』の成立を導いた六朝後期の言語状況を、従来の南朝中心の分析ではなく、北朝学術史の側面から再検討しようとするものである。
- ②これまでの『切韻』研究を含む六朝学術研究は、六朝文化の中心であった南朝の学問の系譜の中で、それを考えようとするものが主流であった。本研究は、従来の研究とは逆に、異民族であった鮮卑が、漢民族に対峙する形で北魏・北周の王朝を維持する過程で、強い個性の多言語国家を成立させていたことを重視し、『切韻』成立に到る学術史の中で北朝の役割を積極的に評価し、これまでの南朝偏重の六朝学術を、北朝側から再構築しようとする所に、特徴がある。
- ③近年、文学の領域では、中国の若い研究者によって、北朝文学史に関する专著が幾つか発表されている。本研究で、北朝の学問を言語の側面から分析することは、そのような新しい流れと呼応することであり、より重層的な六朝学問史を再構築する道を拓くものである。
- ④申請者は、これまで、「美としての楽へ」(『中国文学報』50)「陸機と楚」(『中国文学報』53)において、北

---

## A02 古典としての古典学 宋学文献を中心に

研究代表者 土田 健次郎

早稲田大学文学部 教授

#### 研究目的

本研究では、中国の道学を代表とする宋学の古典学を、朱子学の注釈書及び口語文献として古典になりえた『朱子語類』を中心に検討する。かかる著作(編著、弟子の編纂書も含む)は、古典の注釈であるとともに、それ自体が古典となった。ここに古典が新たな生命力を得ていく一つのパターンを看取できる。本研究では今まで未使用の資料を利用したテキストに関する研究とともに、朱熹の経書解釈の方法論の徹底した分析を行う。朱熹の方法の客観性重視の側面は直接間接に清朝考証学や日本の古学に影響をあたえた。また経書に対するもう一つのアプローチ、つまり修養で得た体験を読み込む主観的理解には、陽明学などにも連結していく面がある。これらの調査・分析は、思想概念の解析に比して立ち遅れていた宋学の古典及び古典学の研究に基礎をすえるものである。

#### 研究計画・方法

本研究ではまず資料と先行業績の蒐集を行う。申請者は今回の主題に関する資料を集めてきたが、各地に散在する朱熹の文献の元明の各種版本が依然未使用であり、朱熹以降の朱子学研究の膨大な蓄積の中で多くの重要な文献が埋もれている状況から、更なる蒐集の必要を痛感



「礼」をはじめとする古典籍をどう解釈し、利用したかを跡づけた上で、楽府詩とりわけ雅楽に属する歌詩の制作について検討する。

3) 賦以外の文学作品、たとえば揚雄の「太玄経」「方言」などをとりあげて、古典をいかに解釈しているかを整理、検討する。

平成12年度

前年度の1)～3)の研究を継続する以外に、馬融や蔡邕ら後漢の学者であり文人でもある人物の文学作品を対象にして、古典の解釈が文学にどう作用しているかを探究する。

---

## A02 プラフマナ研究 ヴェーダ散文文献の翻訳と注解

研究代表者 後藤 敏文  
東北大学文学部 教授

### 研究目的

ヴェーダは紀元前二千年期の後半から仏陀の出現に先立つ時代に懸けて順次製作・編集された、古インドアーリヤ語の古層(ヴェーダ語)で書かれた宗教文献群の総称である。その中、散文で書かれた祭式を巡る議論は紀元前800年頃にまで遡ると推定され、以後200から300年の間に、各学派の「プラフマナ」として集成された。(比較的よく知られている「ウパニシャッド」はこれを引き継いで成立した文献である。) プラフマナは言語、内容ともに重要な文献である。言語の点では、インドヨーロッパ語の純度の高い散文としては最古の姿を示し、ギリシャのホメロスの叙事詩がほぼ同時代に成立した韻文であることを考えてもその重要性が理解される。後のサンスクリット語やパーリ語を始めとする中期インド語の展開を理解する上でも基本的な意義を持つ。内容の点では、儀礼に用いられる讃歌・祭詞と祭式行作の意義付けを巡る思弁を中心としつつ、世界の創生・構成、生命の発生と循環、日・月・季節・年ごとの行事の根拠付け、社会構成の原理、生物の分類、言語の分析などに互って、当時の「世界理解の学」が背景に総動員されている。従って、この文献の厳密な理解からは、後のウパニシャッド、仏教、ジャイナ教へ至る思想を理解するための基礎が得られるだけでなく、人類の古今の宗教研究一般や、今日盛んなフィールド研究に基づく文化の諸相の研究にとっても、文献に裏付けられた基本的な情報・比較材料の提供が期待される。また、言語上姉妹関係にあるイランをはじめ、古代ギリシャ、アナトリア、さら

にはヨーロッパ文化の古層や中央アジア、生活文化の点ではさらに西南アジアの遊牧社会との共通要素と異質な点について、確実な分析への視点を提供する。今日までのヴェーダ文献研究の各分野での進展は、漸く信頼できる翻訳と深い理解とを可能にする基盤をもたらした。ここに、全く新しい厳密な翻訳と注解の提供が待たれる所以である。膨大な文献群から、特に重要で目的に適った部分を選んで多角的な注記とともに提供したい。

### 研究計画・方法

① 期間内に明らかにする対象：20～30篇の纏まりのある部分を選び、原典の読みを確定し、翻訳する。簡素な文体で、当時の専門家間の祭式解釈という枠組みの中で語られる物語、神話が多いので、詳細な説明、注記が必要となる。祭式の説明、研究史、他の関連箇所への言及の他、原典批判、語形、アクセント、語彙、シンタクス、人物・事物に関する個々の注記を付す。これらを出版原稿の段階にまで整える。ヴェーダ散文の文法書、読本に類するものは今日まで国内外を通じて存在しないので、語彙集と簡便な文法とを付して、ヴェーダ散文研究への高度な入門書としたい。

② 学術的な特色・独創的な点、結果と意義：これまで、類書としては辻直四郎著「古代インドの説話 プラフマナ文献より」(春秋社1978)が唯一のものであり、外国語においても挙げるべきものは無い。その後、印欧語比較言語学、インド文献学、特にその言語と祭式の研究は飛躍的發展を遂げている。しかし、それらの成果は個別分野ごとの個々の先端的な研究に止まっており、それらを総合的に動員して、検証可能な学術的な形にまとめたものはなく、まさに機が熟していると思われる。成果として、宗教、歴史(特に事物、農耕牧畜等の技術、社会などについて)に関する研究を始め、文化人類学、民族学、比較言語学の諸分野に典拠のある資料を提供することとなろう。輪廻、業など、後のインドを規定した諸観念が確定したのもこの文献群における議論の展開の中においてであり、インド思想史、仏教研究に対しては直接に寄与する情報が提供できる。

③ 関連研究での位置づけ：研究史の発展段階における意義は②に述べた。申請者は印欧語比較言語学の国際学会研究報告誌「クラチュロス」に、ヴェーダ語散文のこれまでの研究史を総覧した報告を2003年までに発表するよう委託されている者であり、分野の最先端に行く成果が発表できるものと自負している。文献研究の各アスペクトを総合した、現段階での一種の到達点を示せようし、今後の研究への示唆ともなろう。仏教以前の文献研究は、その必要性が早くから指摘されておりながら、我が国のインド研究の中では手薄な分野であったが、将来

の発展に一石を投げられればと願っている。アクセントが伝承されているテキストが多く、歴史文法に言及することもあるので、これまでインド学で普通に用いられてきた特殊文字では足りないものがあり、原典の提示には、今後の国際標準に合わせるべくフランクフルトのTI-TUSの協力を得たい。

---

## A02 法称の推論説とその展開

研究代表者 岩田 孝  
早稲田大学文学部 教授

### 研究目的

平成七年から二年間、法称（七世紀）の主著『知識論決択』の第三章での「他者の為の推論」の定義を分析し、論難における重要な論法である帰謬法について法称が印度仏教で初めてその妥当性を論証したという点を明らかにした。本研究では、論難において最初に提示されるべき主張命題の定義を分析し、『知識論決択』の当該の箇所の独語訳研究として発表する。これは、オーストリアのSteinkellner教授の計画する独語訳による古典解読研究の一環であり、原典の歴史的解釈に属する。哲学的な解釈に基づく研究としては、仏教論理学と形式論理学との比較を考察する。仏教論理学は喩例を用いる為に帰納的であるとされるが、喩例のない場合の推論を分析して、帰納的ではない思考がどの程度存するのかを考察する。これが本研究の第一の目的である。更に、法称の論理的な思考が印度仏教思想史の中で占める位置を知る為に、サハジャヴァジュラ（十一世紀）の宗義書『定説集成』を解読し、併せて、同著者の『十真実論釈』のテキストを校訂し分析する。これらの後期仏教の視点から仏教の諸教理を総合的に捉えることにより、法称の仏教論理学的な立場を思想史上で明確にする。これが本研究の第二の目的である。

### 研究計画・方法

法称の『知識論決択』における「主張命題の定義」の部分の独語訳する。古典研究が開かれたものとなるように和訳研究を平行して進める。同書の梵文原典は散逸しているので、翻訳に際しては、西藏訳が基本資料になる。梵文の文脈に相応して確実に翻訳する為に、仏教内外の諸文献を調べ、そこに引用されている『知識論決択』の梵文断片を回収する（印度論理学関係図書購入）。梵文断片のない部分については、可能な限り還梵を試みつつ翻訳する。還梵においては、西藏訳と既知の梵文断片と

の構文上の対応が不可欠である。この対応を検索できるように、西藏訳のテキストと梵文パラレルとを対照させた基本資料を作成する。この作業の為にコンピューターを購入する。以上は歴史的解釈に基づく研究である。哲学的な解釈研究としては、西洋の演繹的な思考と仏教の帰納的な思考の相異を踏まえながら、法称の他者の為の推論説に見られる、帰納的ではない思考を検討する。その結果を平成十年スイスで開催される国際仏教学会でパネリストとして発表する。その際にSteinkellner教授と会い、独語訳について意見を交換する（外国旅費使用）。

---

## A02 古典インドにおける聖典解釈技術法の基礎的研究

研究代表者 吉水 清孝  
北海道大学文学部 助教授

### 研究目的

本研究は、聖典解釈学派（ミーマーンサー学派）の代表的学者であり、古典期のインド哲学史上極めて影響力の大きかったクマーリラ（西暦紀元後600年前後）の代表的著作『解釈原理の評釈』（Tantra-vaartika）の原典写本のマイクロフィルムを収集し、第2巻第2章について写本の解読により既成の刊本のテキストに訂正を加え、この章の主題である「聖典解釈における行為規定の区別基準」についての見解をもとに、クマーリラにおける「行為規範の受容の仕方」を究明する。本研究代表者は学位論文において、クマーリラと同時代に生きた解釈学者プラバーカラの聖典論を解明し、プラバーカラが、ヴェーダ聖典を一種の有機体のように統一ある機能を果たす全体とみなしていたことを解明した。さらに、その後発表した一連の論文によって、クマーリラに先立って聖典解釈学を大成したシャバラが、これまでの通説とは逆に、クマーリラよりも寧ろプラバーカラと同じく、宗教的行為の本質を個人に先立って確立している伝統的行為理念の実現にあると見ていることを立証した。クマーリラは目的達成に向かって自発的に行為する個人の側に立って聖典論を組み立てていることが従来から指摘されていたが、クマーリラはシャバラが完成した伝統的解釈学の枠組みを批判的に転換したことになる。クマーリラが具体的なヴェーダ聖典解釈の場面で、いかにして解釈学の革新を行ったかが本研究により解明される。

### 研究計画・方法

『解釈原理の評釈』の刊本では用いられていない本文写本のマイクロフィルムをBritish Library, Londonおよび

びBodleian Library, Oxfordに依頼して収集し、第2巻第2章についての刊本と写本との照合表を作成する。これと平行して『解釈原理の評釈』刊本の第2巻第2章部分のテキスト・データベースを作成する。このためにパーソナル・コンピューターを新たに設備品とする必要がある。作成したデータベースを利用して論題ごとの術語の用法の共通性と差異性に留意し、また引用された個々のヴェーダ文の出典と文脈を押さえつつ、『解釈原理の評釈』第2巻第2章の骨組みを呈示するための科段式の詳細な内容梗概を作成する。さらに文法学や法典などの他分野の規範論との関係を2年間の内で可能な限り解明する。現在絶版となっている図書を複写するため国内の他大学で資料収集と調査を行う。以上の作業を基にして、クマーリラが、第2巻第1章で扱った解釈学上の諸概念を、第2巻第2章でどのように応用しているかを解明する。それら諸概念のうちには、bhaavanaa (目的実現に向かう行為の一般形式)、apuurva (元来は各行為規定独自の行為理念、クマーリラにおいては行為により自我の内に蓄えられる潜勢力)、eka-vaakyataa (構文上・文脈上の統一性)、kalpanaa-laaghava (想定)の援用を最小限にする解釈)等が含まれる。

### A03 「情報処理」

#### A03 平安時代物語文の比較計量的研究

研究代表者 今西 裕一郎  
九州大学文学部 教授

研究分担者 小西 貞則  
九州大学大学院数理学研究科 教授

研究分担者 室城 秀之  
白百合女子大学文学部 教授

##### 研究目的

①源氏物語に代表される平安時代の物語は、漢語の使用を極力避け、和語(やまと言葉)をもっぱら使用する和文というわが国固有の文章で書かれた。和文は9世紀、平安時代中期における仮名の成立を承け、10, 11世紀の平安朝女流文学において花開き、完成した文章である。と同時に、やまと言葉という固有の語彙、仮名という固有の文字で書かれた和文は、日本語の膠着語として息遣いをもっとも端的に現れる文章でもある。本研究は、和文の典型として後世に大きな影響を与えた源氏物語の文章に、語彙の計量分析という観点から迫り、かつそれを

他作品の和文(今回は『うつほ物語』を取り上げる)と比較対照して、和文の生理生態に科学的なメスを入れ、平安時代物語文の特性を客観的に解明しようとするものである。

②『源氏物語』に代表される平安時代物語の個々についての研究は、国文学の領域において今日ほとんど行き着くところまで行った観がある。しかし、その文体に関する研究のみは、従来、文学研究者の直感的判断に大幅に依拠する印象批評的な方法が主流であった。もちろん、優れた直感にもとづく文体批評には聞くべきものも少なからず見出されるが、客観的な根拠を提示しての説得力という点では、必ずしも満足できるものではなかった。本研究は、『源氏物語』、『うつほ物語』の両作品について、克明な品詞情報を付したデータベースを作製し、それをもとに計量分析を施して両作品の文体の特徴を把握しようとするものである。これまで平安時代の文学作品についての統計的研究は皆無ではなかったが、詳細なデータベースを駆使しての研究はいまだなく、斬新な成果が期待される。

③本研究は、従来、文学研究者にもっぱら委ねられていた文体研究に、統計分析という新しい分野からのアプローチを試みるものである。このような客観的な方法とデータにもとづく文体研究の成果は、従来の優れた直感的研究に対してはその裏付けとなり、他方、恣意的な印象批評的研究に対しては反省を促す学問的基準を提示することになる。

##### 研究計画・方法

① 作業前田家本を底本とする『うつほ物語』の品詞情報付きデータベースの新規作成。『うつほ物語』は信頼するに足る優れた古写本がないので、嚙経閣文庫蔵の前田本を写真撮影し、それを翻字した上で、入力作業を行う。(今西, 室城)

② すでに作成済みの『源氏物語』のデータベースの点検, 改良作業。

#### A03 インド古典天文学書の研究と伝統暦プログラムの改良

研究代表者 矢野 道雄  
京都産業大学国際言語科学研究所 教授

##### 研究目的

TurboPascalによるインド暦プログラムPANCANG 2を改良する。さらにこのプログラムをWebページの上で処理できるようにするためperl言語に書き換え, CGI